		諸外国の接近	幕府の対応
(寛政の改革) ⑪家斉	松平定信	1792年 ラ(ッ)クスマン〔ロシア使節〕が根室に来航	→ 1798年 近藤重蔵の蝦夷地派遣（最上徳内と共に派遣） 択捉島に「大日本恵登呂府」の標柱を立てる ★東蝦夷地直轄(1799) →〔箱館奉行〕設置(1802)
		エカチェリーナ2世の命で，漂流民の大黒屋光太夫を送還 →ロシア漂流記を桂川甫周が『北槎聞略』に記録	
	(大御所時代)	1804年 レザノフ〔ロシア使節〕が長崎に来航	→ 1806年 文化の撫恤令（文化の薪水給与令） (文化3年) 漂着した外国船に薪水・食糧を与える ★西蝦夷地直轄(1807) →〔松前奉行〕設置(1807)
		ラクスマンに交付した信牌（長崎への入港許可証）を持参	
		1808年 フェートン号事件（イギリス） ナポレオン戦争の余波を受け，イギリス軍艦フェートン号が オランダ船を追って長崎に侵入→松平康英〔長崎奉行〕が自害 →★イギリス船が宝島（薩摩）・大津浜（常陸）に上陸(1824)	1808年 間宮林蔵の樺太調査 →シーボルトが命名 樺太が島であることを確認（間宮海峡を発見） → 1825年 無二念打払令（異国船打払令） (文政8年) 清・朝鮮・琉球・オランダ船以外の外国船の撃退を命じる ただし，オランダ船は長崎以外では撃たれる
		1811年 ゴロー(ウ)ニン事件（ロシア） 国後島を測量中のゴローウニンを抑留 ★『日本幽囚記』 →ロシアは報復として高田屋嘉兵衛を抑留（のち両者釈放）	
		1837年 モリソン号事件（アメリカ） 同年に大塩平八郎の乱　モリソン号が漂流民の送還・日本との通商を求めて来航 →浦賀（相模）・山川沖（薩摩）で砲撃	→ 1839年 蛮社の獄（幕府の措置を批判した洋学者を処罰） 高野長英『戊戌夢物語』 渡辺崋山『慎機論』 小関三英（連坐を恐れて自殺） 尚歯会（知識人による会合）に出席
(天保の改革) ⑫家慶	水野忠邦	1840年～アヘン戦争（イギリスVS清） 1842年 南京条約（清はイギリスに香港を割譲）	1841年 軍事改革（高島秋帆を招き西洋砲術を採用） → 1842年 天保の薪水給与令（文化の薪水給与令に戻す）
	阿部正弘	1844年 オランダ国王ウィレムⅡ世の開国勧告 12代将軍徳川家慶に勧告	［安政の改革 by 阿部正弘〔老中〕］ ①人材登用　徳川斉昭〔海防参与〕・川路聖謨〔海防掛・勘定奉行〕 ②国防強化　大船建造禁（武家諸法度の規定）の緩和（P38へ） 江川英龍が伊豆韮山に反射炉・江戸品川沖に台場を築造 ③洋式訓練　講武所（江戸で武術訓練）・海軍伝習所（長崎で海軍訓練） ④洋学研究　洋学所(1855)→蕃書調所(1856)（のち洋書調所→開成所） ★蛮書和解御用（1811年に設置した蘭書翻訳機関）を強化 →高橋景保の建議（のちシーボルト事件）
		1846年 ビッドル〔アメリカ東インド艦隊司令長官〕が浦賀来航 アメリカはアジアに捕鯨のための港がほしかった	
		1853年 ペリー〔アメリカ東インド艦隊司令長官〕が浦賀来航 (嘉永6年) 4隻の「黒船」（旗艦=サスケハナ号）を率いて開国を要求 →久里浜に上陸し，フィルモア〔米大統領〕の国書を提出 ★阿部正弘は開国要求に対し大名・幕臣に対応を諮問	→
		1854年 ペリーが軍艦7隻を率いて再来航 ★『日本遠征記』（ペリー艦隊の日本遠征記録）	→ 1854年 日米和親条約（→のち，英・露・蘭とも締結） ①アメリカ船に燃料・食料を提供する ②難破船や乗組員を救助する 伊豆 ③下田・箱館の開港（領事の駐在を認める→のちハリス着任） ④アメリカに片務的最恵国待遇を与える
⑬家定		(1853年 プ(ゥ)チャーチン〔ロシア使節〕が長崎に来航)	→ 1855年 日露和親条約（下田で川路聖謨が締結） ①下田・箱館以外に，新しく長崎を開港 ②日露の国境は択捉島・得撫島の間（樺太は両国雑居）
		★安政の大地震（1855年に江戸に発生した地震→「鯰絵」が多数描かれる）	
	堀田正睦	1856年 ハリス〔アメリカ駐日総領事〕の下田着任 1856年 アロー号事件（第二次アヘン戦争の契機となった事件） 1858年 天津条約（清が英・米・露・仏と結んだ講和条約）	→ 1858年 日米修好通商条約（→のち，英・露・蘭・仏とも締結） ★安政の五カ国条約（米・英・露・蘭・仏との修好通商条約） ①堀田正睦〔老中〕が通商条約調印の勅許要求→孝明天皇が拒否 ⇩ 天皇の勅許を得ることで批判を緩和しようとした ②井伊直弼〔大老〕が無勅許のまま調印（違勅調印）
⑭家茂	井伊直弼〔大老〕	［政局の転換］ ［南紀派］徳川慶福〔紀伊藩主〕14代家茂と改名 井伊直弼〔彦根藩主〕のち大老に就任(1858) VS P53へ ［一橋派］徳川慶喜〔徳川斉昭の子〕 徳川斉昭〔前水戸藩主〕 松平慶永〔越前藩主〕 島津斉彬〔薩摩藩主〕	下田は ①神奈川（→横浜）・長崎・兵庫（→神戸）・新潟の開港 閉鎖 ②江戸・大坂の開市（のち延期）　＋箱館 ③通商は自由貿易とする（幕府は貿易に干渉しない） ④開港場に居留地（外国人の居住する地域）を設ける ⑤領事裁判権（治外法権=外国人が在住国の裁判を受けない） 協定関税制（関税自主権がなく両国の協議で関税率を決定）
		1858年～安政の大獄（井伊直弼が反対派の大名・志士らを弾圧） 橋本左内（越前藩士）・吉田松陰（長州で松下村塾を開く） 江戸で処刑 頼三樹三郎（頼山陽の子）・梅田雲浜（若狭小浜藩士） 1860年 桜田門外の変（尊攘派の水戸脱藩士らが井伊直弼を暗殺）	→ 1860年 日米修好通商条約の批准書交換 ポーハタン号（米艦）＝新見正興〔外国奉行〕 咸臨丸（随行艦）＝勝義邦（海舟）〔幕臣〕 ↓ 幕府がオランダから購入した船で，日本船として初めて太平洋を横断

［B］貿易の開始

貿易の開始

①貿易開始　1859 年～

②貿易形態　居留地貿易（開港場に設けられた外国人の居住地域での貿易）

③貿 易 港　1 位＝横浜・2 位＝長崎・3 位＝箱館

④貿易相手　1 位＝イギリス・2 位＝フランス

★アメリカは南北戦争で後退

⑤輸 出 品　1 位＝生糸・2 位＝茶・3 位＝蚕卵紙

★蚕卵紙はイタリア・フランスにおける蚕病の流行が背景

⑥輸 入 品　1 位＝毛織物・2 位＝綿織物

蚕の繭→→→→生糸→→→→→絹織物

製糸業　　絹織物業

［産業の発達・衰退］

発達＝製糸業（マニュファクチュア経営が発達→生糸を輸出）

衰退＝絹織物業（原料の生糸不足が原因）

綿織物業（安価な綿織物輸入が原因）

貿易の問題点

［大幅な輸出超過（問題点①）］

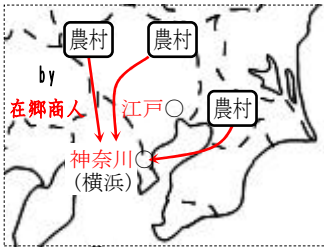
生産地と結びついた在郷商人が問屋を通さず，

直接商品を開港場に送る→江戸・国内の品不足＝物価高騰

1860 年　五品江戸廻送令（重要輸出 5 品の江戸への回送を命じる）

五品＝雑穀・水油・蠟・呉服・生糸

but 在郷商人の反対，諸外国から自由貿易への介入だとして批判され，効果はあがらず



農村（在方）を拠点とする在郷商人（諸商人）が江戸（御府内）を通さず開港場神奈川（横浜）へ商品を輸送

↓

江戸などで品不足により物価高騰

→まずは江戸への商品輸送を命令

＝五品江戸廻送令（1860）

［金銀交換比価の相違（問題点②）］

金銀比価＝日本（金 1：銀 5）⇔外国（金 1：銀 15）

→大量の金貨が流出＝大量の銀貨が流入

1860 年　万延小判鋳造（金流出防止のため悪貨鋳造）

貨幣の価値が下落したため物価高騰

物価高騰＋コレラ　流行の原因は外国人

→天皇崇拝（尊王論）＋外国人排斥（攘夷論）

［尊王攘夷運動（排外的政治運動）］

1860 年　ヒュースケン（総領事ハリスの通訳）暗殺

1861 年　東禅寺事件

水戸藩浪士が江戸高輪のイギリス仮公使館を襲撃

↓

1862 年　イギリス公使館焼き打ち事件

高杉晋作らが品川御殿山のイギリス公使館を襲撃

［NOTE］

＜最恵国待遇（条約締結国の一方が，条約を締結した相手国に対して，第三国に与えている最も恩恵的な待遇と同等の待遇を与えること）＞

日本 ― アメリカ　日米和親条約（下田・箱館の開港）

有利な内容は自動的に追加（最恵国待遇）

but アメリカのみ適用される

＝片務的最恵国待遇　cf. 双務的

ロシア　日露和親条約（下田・箱館・長崎の開港）

＜協定関税制＞　↱ 品目ごとの関税率の詳細は貿易章程に記載

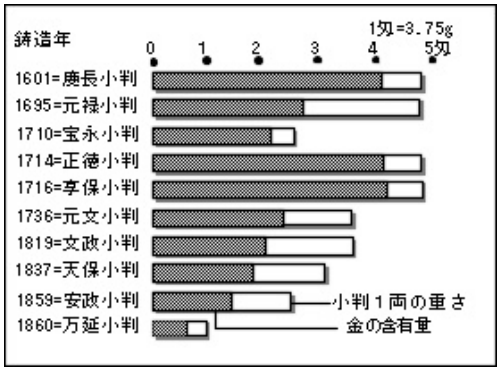
輸入関税率＝平均 20%→のち 5%　by 改税約書（1866）

日本 ― 運上（関税） ― アメリカ

自国で自由に決められる＝関税自主権あり（国定関税制）

両国で協議して決める＝関税自主権なし（協定関税制）

＜貿易章程の関税率＞

輸入品＝0%（衣服・家財など）・5%（食糧など）・35%（酒類）・20%（その他）

輸出品＝5%（輸入品・輸出品の運上（関税）はどちらも幕府の運上所（税関）に納入）